

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	大分県
推進地域名	豊後大野市

1. 事業推進の体制

(1) 検討委員会

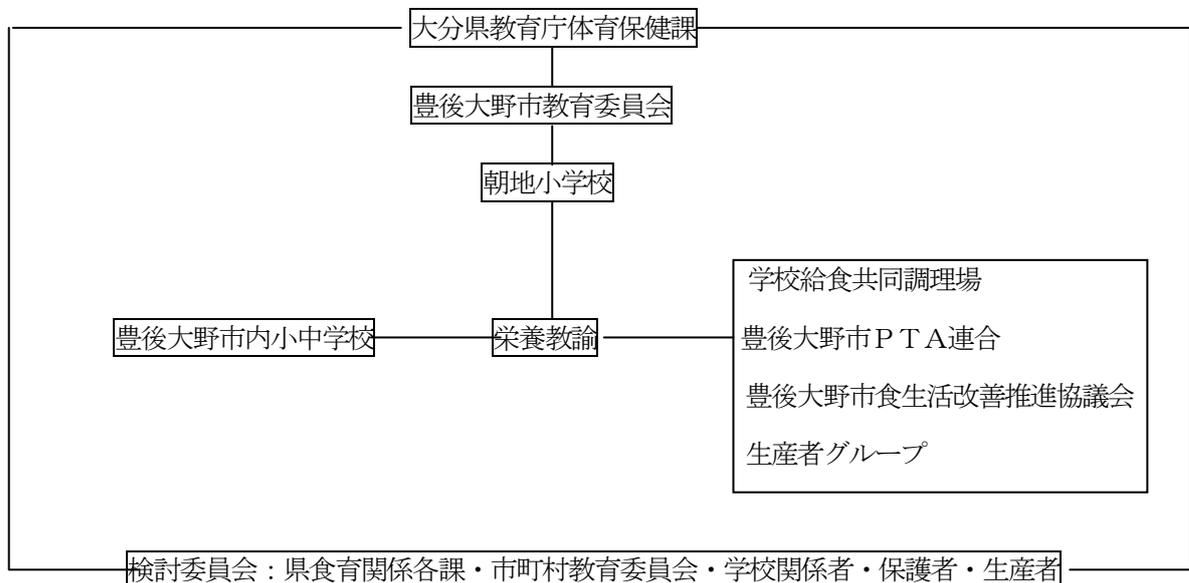
豊後大野市食育推進検討委員会

(2) 推進地域（実践中心校）

豊後大野市立朝地小学校

（協力校 豊後大野市立朝地中学校）

(3) 事業の実施体制



* 校内体制は、研究推進委員会のもとに教科・道徳研究部、総合・特活研究部、地域・家庭研究部の3つの部会を設け研究する。

2. 具体的取組等について

テーマ1

各教科等における食に関する指導の充実のための取り組み

- 各教科等において食に関する部分を洗い出し、食に関する指導の全体計画、年間指導計画を作成した。
- 生活科、社会科、理科、家庭科、総合的な学習の時間において、各担任と栄養教諭が教材や指導方法の工夫をしたT・T授業方式による指導を行う。



【総合 食べようモドゥごはん】



【理科 トモロシのヒゲの正体】



【生活科 やさいを知ろう】



【総合 地域の食材を知る】

3. 総合的な学習の時間等を利用して農業体験学習等を行い、児童生徒の食の大切さや地域の食文化理解に努める。

(1) 地域の方の畑をお借りして、農業体験学習を行う。

自分達で植え、育て、食べる、これら一連の活動を通して・食の大切さを学ぶとともに自分のいのちや健康について考える子どもの育成に努める。また、地域の方々や中学生との貴重な交流の場とする。

①各学級園や学校園での野菜づくり

学年ごとの学習サポーターさんや「JAおおの」方の指導を受け、学級園、学校園で野菜を栽培する。



【 1年 トマトの苗植え】



【2年 きゅうりの育ち】



【3年 冬野菜の植え付け】



【4年 茄子の収穫】



【6年 ピーマンの苗植え】



【 学校園での全校作業 】

②朝地町のブレンド米「綿田米」の田植えと稲刈り体験学習 (5年生)

今から1300年前が地名の始まりの「阿志野郷(あじのこう)」=あじのよい 米の郷 地域の皆さんの支援によって5年生が米づくり体験を実施。米づくりとともに、阿志野郷の農地を共同の力と知恵で守っていかうとしている地域の方の思いも学習することができた。



【 田植え 】



【 稲刈り 】



【授業「綿田米を育てる原田さん」】

(2) 収穫物を使った調理実習や親子料理の実施

- ① お世話になった学習サポーターさんへ感謝の意味を込めて野菜料理をおもてなしする。
- ② 地域で活躍する食生活改善推進協議会の会員さんが講師となり、収穫物を使った地域の料理を教えてください。
- ③ 収穫した野菜料理を中心とした親子料理教室を実施する。



【 1年 野菜パーティ 】



【朝地のおやつ じり焼きづくり】



【 4年 親子料理教室 】

テーマ2

食と健康など、食育を通して望ましい人間形成を確立する取り組み

1. 児童生徒が「食」と「健康」に対する重要性を認識し、将来的に自ら生活習慣病を予防する態度が育成できるような学ぶ場の工夫をする。

(1) 食育を校内研究に据え、食に関する全体計画を基に全教職員が共通認識し教育活動全体で取り組む。

研究テーマを、食育の推進をとおして「自他のいのちや健康、思いを大切にしようとする子どもの育成」をめざし、授業や給食時間の中で五感を使って楽しく学ぶ場や教具、思いを相互に交流する場を仕組む。

- ① 給食時間における指導の充実
- ② 学級活動での指導時間の確保（年間指導計画）
- ③ 保健（給食）委員会の活動（毎日の給食を教材とした放送や掲示等の常時活動と全校集会の実施）



【給食時間】



【全校集会 朝ごはんの大切さ】



【放送委員による給食放送】



【給食掲示板】



【学級用 栄養ボード】

(2) 食育講演会を開催する

- ・12月3日（木）保護者や地域の方々を対象に、テーマ「食を通して食事やいのちの大切さを考えよう」の講演会を開催する。講師は金丸佐佑子氏。
- ・2月5日（金）公開研究発表会では、教職員・保護者・地域の方々を対象に地域食育講演会を開催する。演題「豊かな心をはぐくむ食育のすすめ」、講師は松本和昭氏。



【食育講演会】

2. 偏食傾向にある子どもや食物アレルギーのある児童への相談活動など

(1) 栄養教諭が学級担任・養護教諭と連携しながら、偏食傾向にある子どもに対して給食時間の後や放課後に相談活動や資料配付を行った。

(2) 夏休み中に、食物アレルギーのある子どもの保護者、給食担当者、養護教諭を対象に連絡会を開催する。

併せて、保護者との個別相談の時間を持つ。

- ・アレルギー対応の概要（調理設備、除去食・代替食、アレルギー診断などについて説明）
- ・意見交換
- ・個別相談（保護者）

3. 縦割り班などの校内体制を確立し、農業体験学習をする中で、子どもたちがお互いの良さを認めあう望ましい人間形成を確立する。

(1) 縦割り班ごとのサツマイモ植えと収穫体験学習

(2) 子どもたちが、地域のたくさんの学習サポーターの方と一緒に作業をすることで、農作業の技術の素晴らしさや栽培の知識などを知り、地域をより身近に感じ朝地の人々のよさを理解する。

(3) 隣接する朝地中学校の2年生とサツマイモの畝づくりを一緒にすることで、中学生と交流が深まる。



【中学生と農園の畝づくり】

テーマ3

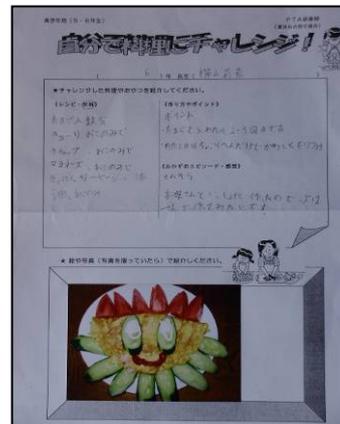
学校と家庭・地域との連携による食に関する指導の充実のための取り組み

- 食生活実態調査を行い、効果的な家庭への啓発資料を作成しPTA研修等で活用し、家庭における食育の推進を図る。
 - 平成21年7月12月に食生活アンケートを児童、保護者に対し実施し課題を把握する。
 - 家庭への啓発リーフレット「食べよう 朝ごはん」を作成し豊後大野市内全保護者に配布する。(11月配布) このリーフレットは研修等でも活用する。
- PTA事業で各学年ごとに「食の学級テーマ」を決め取り組む。
各学年の取り組みは、食育通信や学校だよりで家庭へ知らせる。
- 親子給食を実施する。

公開授業日に低・中・高学年に分け、給食試食会を兼ねた親子給食を実施する。保護者には給食や子どもの給食の様子などの感想をいただく。(5月・6月・10月実施)

《保護者の感想》

- 給食当番の役割をしっかりとこなしているのに好感がもてた。
- 家でも給食のことや食育の話が出るようになりました。
- 家で野菜をあまり食べないのに、友達と食べるとよく食べるようです。素材の味を生かしたものを家庭でも出せればと思います



【5・6年学級テーマ

「自分で料理にチャレンジ」記録シート】



- 給食調理員の学校訪問や、子どものセンター見学、おたよりや掲示物などで学校と給食センターが交流する。
- 栄養教諭が市内の他校の給食試食会や講演会に出席し、食の大切さについて広く知らせる活動を行った。
- 栄養教諭が市内の他校において、生活科や家庭科、学級活動の時間に担任とT. Tによる指導をする。
- 豊後大野市食育推進検討委員会に校長・研究主任・栄養教諭が出席し、学校における食育の実践を発表する。

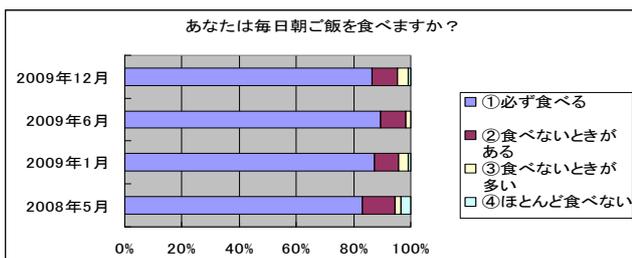
テーマ1～3に共通する事業実施の結果

1. 先進地視察の実施

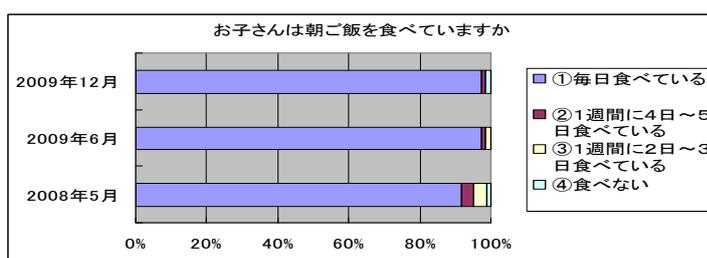
□福岡県八女市津江 八女市立上妻小学校

- 食育・体育上妻プランに基づいた教育活動により「心身の健康を自ら作り出す子どもの育成」をめざし成果をあげている学校。
- 研究構想を具現化する取り組みが具体的、系統的、計画的に実践されていた。
- 授業の単元構成の工夫とともに、情報収集活動、ふれあい活動、実践活動の3つの学習活動の工夫がされていた。
- 自分で作る弁当の日の取り組みや掲示物の充実、各学年ごとの食育プランの作成と確実な実践、子どもの変容が見えるアンケートの個人データの活用など学ぶところが多かった

2. アンケート集計により、見えてきた傾向

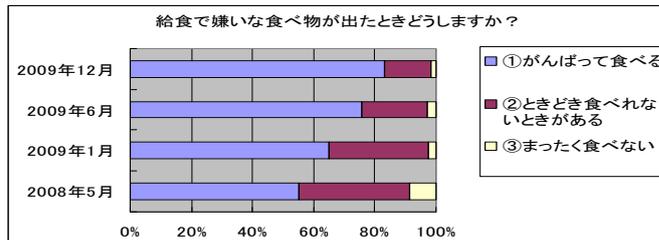
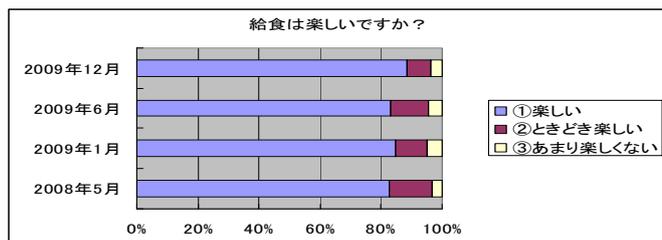


<児童アンケート>

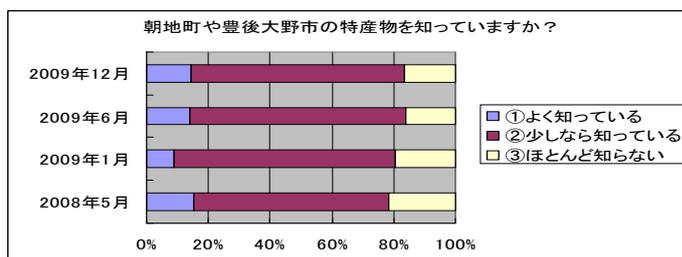
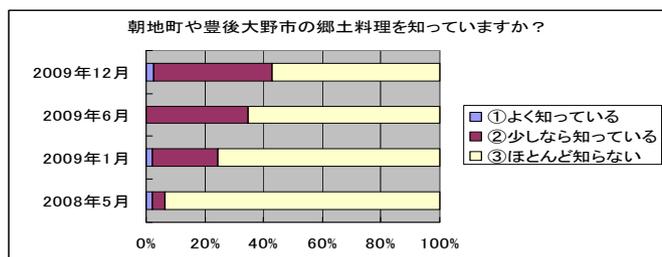


<保護者アンケート>

○朝食欠食が減り、「必ず食べる」という児童が増加している。保護者の意識が高まり、児童自身も朝食の大切さを学んだことが改善につながったのではなかろうか。



- 児童は給食を楽しんでいる。その理由は、「友だちと一緒に話ながら食べるから」「給食がおいしいから」が圧倒的に多い。「家では食べないものが出る」「地元食材を調理してくれているから」等の理由もある。
- 給食で嫌いな食べ物が出てでも食べる意欲をもち頑張って食べる児童が増加している。



○特産物や郷土料理を「知っている」が増加し、興味や関心の高まりがうかがえる。

数字で変化のあった事項について

1. 児童アンケート調査

- (1) 平成21年全国・学習状況調査、自校で行ったアンケートでは、「朝食を食べていますか」の問に対して、毎日食べていると答えた児童数が増加傾向にある。

「朝食を食べていますか」	H21年4月	H21年12月	H21年12月
6年生	90.5%	95.0%	95.3%

- (2) 全校児童を対象にしたアンケートでは昨年度と比較すると、朝食の摂取や食品の好き嫌いについて改善の傾向が見られる。

「朝食を食べていますか」	H20年5月	H21年1月	H21年6月	H21年12月
毎日食べる	83.0%	88.0%	89.3%	87.5%
食べない時がある	11.0%	8.0%	8.9%	8.9%
食べないことが多い	3.0%	3.0%	1.8%	2.6%
ほとんど食べない	3.0%	0.0%	0.0%	0.8%

「食べ物に好き嫌いがありますか」	H20年5月	H21年1月	H21年6月	H21年12月
ある	64.0%	68.0%	66.9%	62.5%
ない	36.0%	32.0%	33.0%	37.5%

「嫌いな食べ物を食べようとしているか」	H20年5月	H21年1月	H21年6月	H21年12月
いつも食べようとする	55.0%	65.0%	75.9%	83.0%
ときどき食べようとする	36.0%	33.0%	21.4%	15.3%
全く食べようとしない	9.0%	2.0%	2.7%	1.7%

(3) 残滓の状況は、主食・副食とも1年間で激減している。

<主食の残滓量>

	H21年1月	H22年1月
1日平均量	2,000 g	453.0 g
一人当たり	14.4 g	3.6 g
割合	9.0%	2.2%

<副菜の残滓量>

	H21年1月	H22年1月
1日平均量	4,100 g	627.0 g
一人当たり	29.5 g	5.0 g
割合	11.8%	2.0%

(4) 給食の地場産物納入については、全野菜使用品目の内、豊後大野市朝地町産物の納入品目数が増加している。

	H20年	H21年
平均品目数	4.8品目	5.9品目

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

1. 学級指導や給食時の指導は、栄養教諭の専門性を活かし、食品の栄養的な働きを児童の発達段階に即して学ばせることができた。食品の働きを知ることで、嫌いな食品でも口にしようとする等偏食の改善につながった。
2. 地場産物を給食に取り入れたり、給食に使われている食品の生産者をゲストティーチャーとして授業を実践したりすることで、食品を身近に感じ、地域の自然や農業に対する理解を深めた。
3. 栄養教諭は生産者と学校をつなぎ、児童に生産者を出会わせることで、生産に携わる人びとの苦勞にふれさせ、感謝の気持ちを育むことができた。
4. 学級園や農園での体験学習を通して、児童自らの手で栽培した作物を給食に使用したり、食べたりすることで、味や香り、色の鮮やかさ等食の豊かさを実感することができた。また、体験活動では、たくさんの食育・農業支援ボランティアとふれあい、ふるさと朝地の人・ものの豊かさに気づききっかけとなった。
5. 親子給食や親子料理は、家庭での食を見直し、改善しようとする意欲につながった。
6. 食育講演会や食育通信、授業公開等あらゆる機会を通して、保護者への啓発活動を行うことで家庭と連携して望ましい食生活の習慣を図るよう努めることができた。

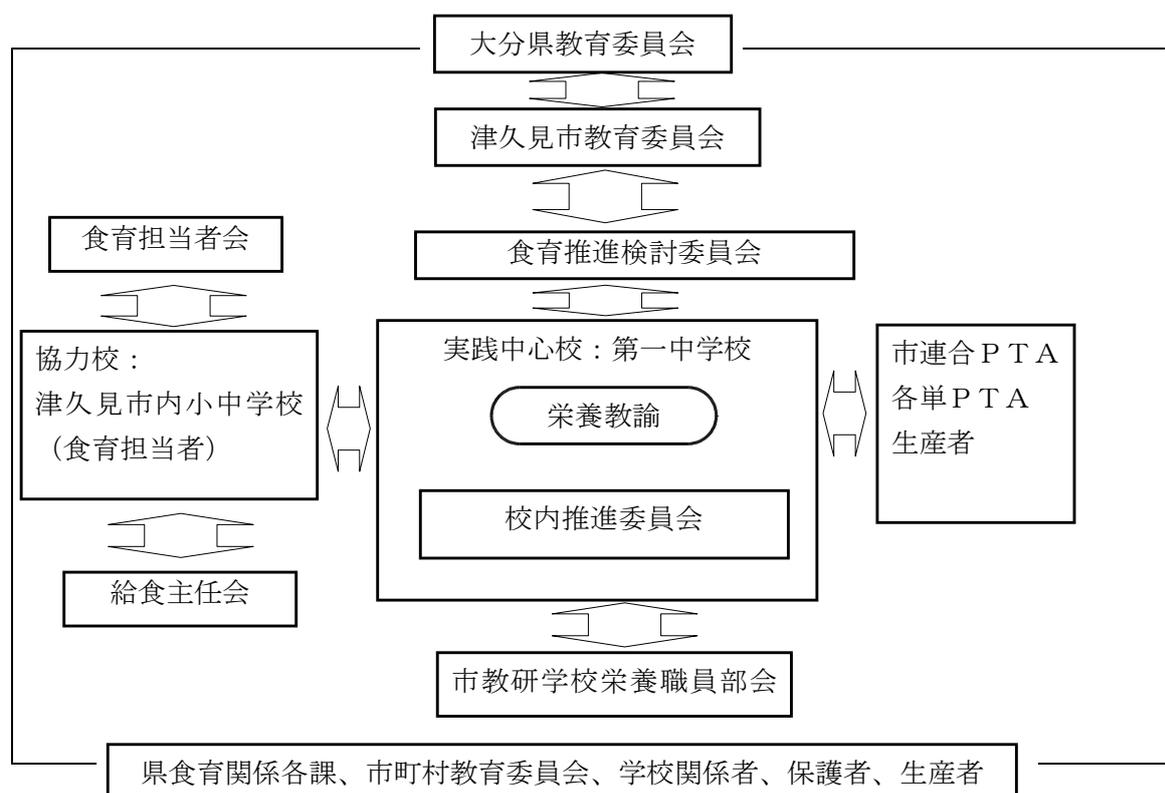
今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

1. 食の全体計画、年間指導計画の見直し
(1) 事業の取り組みを反省し、児童や地域の実態に沿った全体計画や年間指導計画に修正をしていく。
2. T・T授業における栄養教諭の指導の充実
(1) 各教科における食育目標の達成に向けた授業実践では、栄養教諭の支援が有効である。新しい知識を深めることや学習したことを確認する場面等での栄養教諭の支援の在り方を探る。
3. 農業体験学習の継続的体験
(1) 学級園に植えた冬野菜の成長を継続的に観察しながら、収穫まで児童にかかわらせる時間の確保と工夫が必要である。
(2) 年間を通じた農業支援ボランティアの方々とふれあい感謝の気持ちを伝える場を設ける。
4. 家庭への食育の啓発
(1) 夏季休業、冬季休業中に取り組んだ家庭での「自分で調理にチャレンジ」(5・6年生対象)を給食の献立に取り入れたり、PTA広報誌に取り上げたりすることで、家庭に広げ、食生活改善の意欲につなげる。

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	大分県
推進地域名	津久見市

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 市内各校における食育を充実させる取り組み

○各学校に食育担当者を位置付け、食育担当者会を組織した。

○小学校、中学校での食育の授業研究会を開催した。

- ・中学校の授業研究会（7月7日開催）

中学校1年生を対象に、担任による家庭科での食育研究授業を行った。

- (1) 題目 栄養バランスを考えて朝ごはんの献立を考えよう。
- (2) 主眼 栄養バランスを考慮して、自分でできるメニューを班の友達の意見を取り入れながら考えることができる。

- ・小学校の授業研究会（10月16日開催）

小学校2年生を対象に、担任と栄養教諭による生活科での食育研究授業を行った。

- (1) 題目 おやつにさとうはどれだけ入っているのだろう。

- (2) 主眼 ジュース 1 本で 1 日の砂糖の摂取量を超えることを体験しながら知ることで、砂糖の摂りすぎに気をつけて毎日のおやつを食べようという意欲を持つことができる。

○栄養教諭を市内各学校（小学校 7 校、中学校 5 校）に派遣し、食育担当者とともに、食育の授業実践を行った。

テーマ2 学校給食を中心とした学校・家庭で取り組む食育の推進

○学級担任や学年食育担当が、栄養教諭と一緒にT・Tで食育の授業に取り組んだ。

- ・学校給食を中心教材にした食育の授業実践に取り組んだ。
「選択給食の事前指導」や、保健の「生活習慣病とその予防」、英語科で「イギリスの食文化」などで学校給食の献立を教材として取り組んだ。保健体育では、外部講師（県や市の保健師）をG・Tとして招いた。
- ・家庭科で「お弁当のおかず作り」の調理実習を全クラス行った。
- ・学級担任による「お弁当の日」のメニュー作りの授業を全クラスで行った。



○啓発パンフレットを作成した。（年 3 回）

- ・全家庭と市内の各学校、教育委員会に配布し、家庭における食育の推進を図った。



○OPTA活動において家庭での食育の重要性を認識し、生徒とともに望ましい食習慣作りに取り組むため、「お弁当の日」を設定した。

- ・1 回目は、10月14日に「給食のご飯でおにぎり作り」、2 回目は10月19日に「おにぎりの日」3 回目は、11月9日に「お弁当の日」を実施。
- ・家庭科で「お弁当のおかず作り」の調理実習を全クラス行った。
- ・学級担任による「お弁当の日」のメニュー作りの授業を全クラスで行った。



○OPTAの広報部と連携し、「お弁当の日」の特集を広報新聞に掲載した。

○OPTAと連携し、12月に地域に向けた給食試食会を開催した。

○生徒会活動の充実

- ・毎日の給食放送で調理法や旬の食材の話、前日の片付けチェック発表など。
- ・終業式の後、全校生徒から調理員さんへの感謝状を送った。調理員から、完食したクラスの表彰もあった。

○生徒、保護者を対象に、講師を招き食育講演会を開催した。

生徒対象…7月14日（火）「弁当を作る中学生はかっこいい」

保護者対象…9月12日（土）「食卓で変わる。子どもが変わり、社会が変わる」P研修部と連携。

○先進地視察の実施…綾上中学校（香川県）（6月26日実施）

・「お弁当の日」が小学校から中学校、全国へと取り組みが広がっていること。その中で、子どもや家族は暮らしの時間を取り戻し、子どもの自立に向けた取り組みが出来ていた。



テーマ3 体験活動を通じた地域の産物、産業等の理解を促進する取り組み

（1）地域を活用した農林水産業体験学習を実施する。

① さつまいもを育てる

<苗植6月23日><イモの収穫10月14日>

・学校の畑に、全校児童23人で畑3か所にサツマイモの苗植を行った。（6月23日）

地域の方にサポーターとして参加していただいた。

・それぞれ学年毎に水やりや草取りを行った。

・学習サポーターをお願いして一緒にサツマイモの収穫を行った。

・サツマイモは、コンテナ2杯収穫でき、子どもたちは、大喜びだった。（10月14日）



② 育てたサツマイモを使い、昔から食べているおやつ作り

<イモなん作り 11月24日>

地域の方を講師に招き、保戸島で昔から食べている「いもなん」と「石垣もち」を全校で作る会食をした。

食についてのめあてを知らせるとともに、安全や衛生に注意して取り組むことができた。

手指の消毒やマスクをつけるなどし、衛生に気をつけた。

<子どもたちの感想>

・いしがきもちも、いもなんもとってもおいしかったです。

・地域の人がヨモギも持ってきてくれて、うれしかったです。

・みんなで協力して、料理が作れて楽しかったです。

<地域の方の感想>

・みなさんと、いっしょに料理ができてこちらこそ楽しかったです。

・また、機会があったら一緒に作りましょう。



③ 保戸島の魚をつかって料理しよう

地域の食文化に触れることで食に対する意識をたかめるために、魚釣り大会を計画し実施した。さらに自分たちで釣った魚をさばき、給食の下ごしらえを地域の学習サポーターの方々と一緒にすることで、地域の食文化を大切にしていこうとする気持ちを育てたいと考えた。



<魚釣り大会 11月26日(木)>

魚釣りの体験を通して地域の自然に触れ、地域の産物を大切にしようとする気持ちを育てる。

<アジの開き方を学習 12月11日(金)>

地域の学習サポーターの方々が魚をさばく様子を見学した。

(本来は、4・6年生がさばく予定だったがインフルエンザ流行のため)

<児童の感想>

Aさん

私は、今日の魚釣り大会で魚が釣れるか心配だったけど、10匹ぐらい釣れてよかったです。Iさんが大きい「ほご」釣れていてすごかったです。私も小さい「ほご」が釣れました。今日の魚釣り大会で、魚を釣るコツや魚釣りのいろんなことが分かりました。今度は自分で釣ってみて、家族にごちそうしたいです。魚のさばき方を覚えたいです。

アジの下ごしらえを見学



(2) 地場産物を使った親子料理教室を開催する。

<スイートポテト作り 10月15日>

- ・収穫したサツマイモで、2・3年生が親子でスイートポテトを作った。(10月15日)
- ・11月には、地域でよく食されている「いもなん」を学習サポーターに教えてもらい作る計画を予定している。全校児童を3班にわけた縦割り班で実施する。

<児童の感想>

○あまくておいしかった。○おいもは、いろいろな形があって面白い。○家で作って家族に食べさせたい。

スイートポテト作り



(3) 子どもが育てた産物を給食に利用し、地域の産物の良さについて理解を深める。

- ①子どもたちが育てたサツマイモを天ぷらやスイートポテトにして給食で食べる事ができた。また、調理員さんと一緒に全校で給食を実施できた。大学芋が候補になっている。

②アジの開き方については、地域の方を講師に招いて実演して頂き、包丁さばきや開くときのこつなども教えてもらい交流ができた。その日の給食には、ついさっき開いたアジとエビがフライになり献立になった。地域の方や調理員さんに感謝しながら熱々を美味しく食べることができ、子どもたちも満足していた。



あじフライ・えびフライ・けんちん汁

テーマ1～3に共通する具体的計画

○先進地視察の実施 愛知県西尾市立寺尾小学校（9月17日実施）

- ・寺尾小学校の教育について
食育・ABC（外国語活動）を核とした小中一貫教育
教育課程特例校で特色ある教育課程を編成
- ・小学校2年生の食育授業観察について
夏野菜を五感を使って味わい、違いに気づく授業
栄養教諭、養護教諭と連携した授業作り
ワークシート、教具等の行き届いた整理の仕方

以上の内容について研修視察を行った。

○研修視察した内容の還流

- ・小学校の授業研究会、食育担当者会、給食主任会で視察した内容について報告を行った。

数字で変化のあった事項について

<第一中学校>

○給食をいつも完食するクラスが増えた。1クラス→2クラス

○朝食内容のレベルが上がった。

- ・主食のみ食べてきていた生徒が減った。 33% → 28%
- ・主食とおかずの組み合わせで食べるようになった生徒が増加した。 25% → 34%
- ・菓子だけですませてる生徒が減った。 6% → 5%(5名減)
- ・果物だけですませてる生徒が減った。 2% → 0%

○好き嫌いのない生徒が増えた。 13% → 18%

<保戸島小学校>

○今年度から全校で縦割り班毎に集まり毎日給食を実施している。本校（保戸島小学校）の児童の多くが、偏食がある（野菜きらいが多い）ことが課題であったが、縦割り班で協力して準備や片付けを行い、月ごとにめあてを作り給食を食べる中で、少しずつ野菜を食べる子どもが増え、残菜が減ってきた。

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 栄養教諭が市内各学校へ出向き、食育の授業を行うことで、食育に対する理解が深まってきている。
- 自分で植え、収穫し、自分たちで調理した物については、喜びも大きく感謝の気持ちで食べることができた。感想には大好きな家族へ食べさせたいという感想が多くあった。
- 給食を作ってくれる人と子どもと一緒に給食を食べたり話したりする中で「食」への感謝の気持ちや信頼感を持つことができた。
- 芋の苗植えから収穫、料理教室までを地域の人と一緒に体験することにより、互いにつながることもできた。
- 学級担任が取り組んだ食育授業は、日々の食生活や、学校給食の時間などにつながり、心の教育にも成果が出ている。
- 校務分掌の校内食育推進委員会で検討し、職員研修の中に、食育について研修を組み込み、教職員も食についての意識を高めることができた。
- 食育講演会を、生徒、保護者対象にそれぞれ行ったことで、食の大切さ、弁当の日の取り組み方、意義等が伝わった。夏休みに、弁当のおかずを何回も作ってみる生徒がいた。また、保護者から、「食生活と生きることがつながっている」ことや、「子どもの自立に向け、弁当の日を温かい目で見守っていくことが大切である」という感想もあった。
- 学校で行った「給食でおにぎりの日」に残ったご飯で友達のおにぎりを握ってあげたり、暖かい雰囲気教室を包み込んだクラスもあった。
- 地域の保健師を授業に迎えることで、効果的な指導を行うことが出来た。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 通信や掲示物で食教育への取り組みをお知らせしているが、今後はさらに児童の実態をもとに地域や保護者への語りかけや発信を増やしていくことが大切である。
- 全校児童と教職員で全校給食をおこなってきた。会食場所や配膳台など工夫して使ってきたが、家庭科室なので、机の高さが子どもの高さに合わない、配膳台が高いなどの問題がある。子どもの成長やマナーとも関係が深いので、環境整備が必要である。
- 児童の実態をもとに、取り組みの様子や「食教育」の大切さを地域や家庭に働きかけていくことが大切である。
- 給食に対する感謝の気持ちを持たせていくために、調理員との接点を今後も工夫する必要がある。
- 生徒は、栄養に関することを知識としては持っているが、実践が出来ていない生徒が多い。教職員が共通理解して、更に生徒と家庭と連携して食に関する指導を行っていく必要があると思う。特に食生活について関心の薄い家庭への啓発をどう進めていくかが課題である。
- 新学習指導要領の中での食育の位置づけを検討し、学校の実態に合わせて実践する必要がある。